

白山ふるさと文学賞

第九回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

## 夏休みとコケ

鳥越中学校一年

米田 よねだ

柊 しゅう

「あつい。」

息も詰まるような熱気とセミの鳴き声に囲まれながら、僕は思わずそう呟いた。

八月半ばを過ぎた、午後。

僕は部活を終えて、帰り道を、のろのろと自転車で走っていた。

今日は、後はこの上り坂だらけの帰り道を突破し、クーラーの効いた自分の部屋でゴロゴロするだけ、…だが、できることなら毎日ずっと家で寝ていたい。

「あら、新太ちゃん、今日も暑いわねえ。」

家まであと少し、というところで、ちょうど畑仕事をしていた近所のおばさんに声をかけられて、僕は自転車を漕ぐ足を止めた。

「あ、こんにちは。」

「夏休みなのに体操服なんか着て、どうしたの。」

おばさんは汗だくの僕を見て、訊いた。

「部活だったんで…。」

「学生さんは大変ね。あ、そうだ。さつき畑でとれたトマト。持っていって。」

好きでもないトマトを手渡されて、僕はつくり笑いをした。実をいうと、僕はこのおばさんがちよつと苦手だ。こうやってものをよくくれることはとてもありがたいんだけど、その後の話がやたら長い。

「あの、急いでいるんで…。失礼します。」

一刻も早くこの暑さとおばさんの世間話から離れたくて、僕は特に用があるわけでもないのにそう言った。

「そうなの？友達と約束でもしてたのね。」

「友達」という単語は、今の僕にとって聞きたくない言葉の一つだった。けどそんなことなんて知るよしもないおばさんは、続いて今の僕が一番聞きたくない名前までも口にした。

「そういうえば、新太ちゃんの友達の…そう、悟ちゃん。最近見ないわねえ。」

小学校の頃はよく一緒に登下校してたのに、やっぱり中学生にもなる…。」

「あの、トマト、ありがとうございました。」

おばさんの言葉を遮って、心のこもっていないお礼を早口で言うと、僕はその場を後にした。おばさんがまだ何か言っているような気がしたけれど、少し離れるとそれはセミの騒がしい鳴き声の中に溶けていった。

僕、星野新太は、はっきり言って取り柄がない。極々普通の中学一年生だ。強いて言うなら眼鏡が似合う所ぐらいだ。成績は良くも悪くもなく、極めて良い子ではないけど、悪い子なんかでもない。つまり、なんでもかんでも中途半端な人間だった。

それに比べて、僕の友達…だった人、赤城悟は、完璧を絵にかいたような人間だ。休み時間中はいつも大勢の男子の輪の中心で楽しそうに喋っていて、男女の区別なく友達が多い、成績優秀、所属している陸上部でも期待されていて、快活な性格のため、僕の知っている限り誰からも好かれた。そんな彼が、僕は嫌いだった。

僕とは幼稚園からの幼なじみである彼は、僕に妬まれていることも知らずに、中学生になっても根気よく僕と接してくれた。いくら知らないとはいえ、一緒にいても大して得しない僕に悟が気をかけてくれたのは結局、彼が優しかったからだと思う。

だけど僕は、そんな彼の優しさを、溜りに溜まったつまらない嫉妬心である日、踏みにじってしまった。

あれは入学式から三ヶ月ぐらい後のこと。

終礼が終わり、ガヤガヤと賑やかな教室の中で、僕はリュックに教科書類を入れていた。机の中に忘れ物がないかと探っていると、奥の方にグシャグシャになった紙きれを見つけた。さつき返された数学の小テストだった。紙の右上で波打っている「六十四」という赤い数字を見て、僕はすっかり意気消沈した。最近の出来事を思い浮かべて、僕はさらにイライラを心の中に募らせていった。小テストのシワを適当に伸ばして、

リュックに放り込む。そして、荷物を持って廊下へ出ると、悟とぼつたり会った。悟は僕を見ると、ぱつと顔を輝かせた。悩みごととは全く無縁そうなその笑顔を眺めて、そんな顔の出来る悟を、僕はまた羨ましく思ってしまった。

「部活は？」

「ないよ。」

僕がそつげなく答えると、悟が、

「僕もないんだ。一緒に帰ろう。」

と弾んだ声で言った。

生徒玄関に向かって二人並んで歩いている間、ほとんど悟が喋っていた。僕は時々「うん」とか「へえ」なんて相槌を打つだけで、ぼーっとしていた。

二階ぐらいまでやってきたとき、悟が数学の小テストの事について喋り出した。

「新太は小テストどうだった？」

と聞かれた僕は、話して欲しくなかった話題に触れられ、怒りが抑えきれなくなった。

「…悟は、いいよね。」

その言葉が口から漏れると、せき止めてた水が溢れるように、悟への嫉妬心とか自分への不満とかが、どんどん言葉になって放たれた。「勉強もできて、部活でも活躍してて。それに比べて何にも出来ない僕を裏で笑ったりしてるんじゃない。」

僕の突然の言葉に、悟は戸惑った様だった。それでも僕を落ち着かせようと口を開く。

「そんなことするわけないよ。何か悩みごとがあるの？俺、相談にのるよ。」

有めるような悟の口調に、僕は落ち着くどころか更にいきり立った。

「悟みたいの人に、僕の気持ちなんて分かるわけないよ！」

そう言い捨てて、呆然とした悟を置き去りにしたまま、僕は逃げた。

自分のしたことがただの八つ当たりだったことを理解するのにそう時間がかからなかった。気付いてしまうと、自転車忘れ内履きのまま帰ってきたことも、そのせいでお母さんに怒られたことも、夕飯に嫌いなトマトが出たことも、そろそろやってくる夏休みの予定のことも、何にも頭に入らなくなってしまった。あと五日、四日、三日。夏休みまでの日数を指折り数える間、僕は悟に一度も会わなかった。

謝る機会を掴めないまま、今、僕はここにいる。

「ただいまー。」

玄関に倒れこんだ僕を、台所から出てきたお母さんが、

「制服がシワになるでしょ。」

と叱って叩いた。あんまりうるさく言われるのも嫌だから、僕はしぶしぶ歩いて台所に向かった。さつきもらったトマトをテーブルに置いて、冷蔵庫の麦茶をゴクツゴクツと飲み干すと、お母さんが、あの有名な物知りの五歳児のように、赤い顔を爆発させてしまう前に、早々と二階の自分の部屋へ退散した。

部屋に入ると真っ先にリュックの中にある五教科のワークが頭に浮かび、僕はうんざりした。

小学生の時から僕は宿題を溜め込むタイプだった。夏休みが残り二週間を切った所でやっと慌てて本格的に取り組み始めるから、いつもお母さんと悟にお世話になっていた。

「どーしよーかなー、今年は。」

お母さんは去年から僕の宿題についてはノータッチ状態で、手伝ってもらうことなんて期待出来そうもない。そしたら、悟に頼むしか選択肢はないわけだけど、あんなひどいことをしてしまった手前、のこのこと悟の家を訪ねて、

「宿題手伝ってー。」

なんて言えるほど、僕の神経もバカじゃない。

着替え終わって勢いよくベッドに寝転ぶと、天井を見つめる。いつそ、ロボットがいたらと熱烈に思った。試しに机の引き出しを開けてみようかと思ったけど、いくら眼鏡が似合い、勉強が苦手だからといってそんなこと起きるはずがないので、やめた。

そして、起き上がろうとした瞬間、本棚に頭をぶつけてしまい、何冊かの本が散乱した。落ちた本を拾っていると、一冊の本のページが目に残った。

「スナゴケの特徴を知ろう。」

そのページを読み進めていくと、スナゴケは日光に強く、乾燥した所によく育つことが分かった。そこで僕はふと、過去の自分を頭に思い浮かべた。少しでも嫌なことがあると拗ねてどうしようもなく幼かった。でも、このコケにはどんなに厳しい環境でも育っていける力強い生命力があった。僕とコケを比較してみても改めて自分の恥ずかしい行動に気づき、赤面した。

そして、こうしてはいられないと、受話器を取った。

「はい、もしもし赤城です。」

悟が出た。僕は緊張していたけど、なんとか名乗ると、悟からの返事はなかった。やはり怒っていると思いつつも僕は謝った。すると、

「何で新太が謝んの？」

と返された。僕は一瞬？マークに包まれた。

「謝るのは俺の方だよ。新太の悩みに気づけずに今まで過ごしてきたまってるから。だから俺の方こそ、本当にごめんな。」

僕は安心してほっと胸を撫で下ろした。そして、

「ありがとう。」

とつい言ってしまった。すると悟が、

「あっ、そーだ。今からお前ん家行ってもいい？」

「いいけど…なんで？」

「どうせまだ宿題終わってないんだろ。手伝ってあげるよ。」

凶星をつかれて、僕は思わず照れてしまった。

僕、星野新太は、はっきり言って取り柄がない。けどこの夏、何の取り柄もなくたって、今を力いっぱい生き、そしてそれがいつしか取り柄になることを、僕は身を以て経験した。

